

Title	ヘルベルト・マルクーゼ著 榊田啓三郎・中島盛夫・向來道男共訳 理性と革命
Sub Title	
Author	飯田, 裕康
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1962
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.55, No.1 (1962. 1) ,p.96(96)-
JaLC DOI	10.14991/001.19620101-0096
Abstract	
Notes	新刊紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19620101-0096

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

the Organization for European Economic
Co-operation, 1961, pp. 450. \$ 6.00.)

—高橋潤二郎—

ヘルベルト・マルクーゼ著
辨田啓三郎・中島共訳
盛夫・向來道男共訳

『理性と革命』

本書におけるマルクーゼの立場は、思想全
体を眺めやるにその社会史的側面(諸思想が
世界史的発展を媒介にして、現代思想として
実現されるプロセス)を重視し、とくに、第
二次大戦を通して経験したファシズムへの思
想の社会史的帰結を追うことをとおして、現
代思想のもつ危機をあきらかにしてゆこうと
するにある(この点はエピソードに若干コメ
ントされているに止まり、後の分析にまたな
くてはならないが)。マルクーゼは、一貫し
てヘーゲル主義を主題とし、ヘーゲルにおけ
る哲学から社会理論への内的発展(ヘーゲル
における初期の著作から「精神現象学」、
「論理学」を媒介として歴史哲学及び政治哲学へ
の道)のうちでその契機となっている「理性」
の概念をのちの思想がどのようにうけとめ固

有の社会理論を形成したかを探究している。
無論このような企てはマルクーゼに始まるも
のではなく、西欧合理主義の一理解として、
ルカーチ(「理性の崩壊」、「若きヘーゲル」)
にも共通しており、研究史の上からはマルク
ーゼがルカーチの立場に近いといえよう。

本書の主要な内容は、第一部ヘーゲル哲学
の基礎(ヘーゲルと哲学体系)、第二部社会
理論の興隆(キルケゴール・フォイエルバッ
ハ、マルクス、サン・シモン、コント、シュ
タール、ローレンツ・フォン・シュタイン、
グリーン、ボウズンキッド、ファシズム、レ
ーニズム)に分かれているが、中心はヘー
ゲルからマルクスへの、すなわち、哲学から
社会理論への発展にある。ヘーゲルは、理性
的なものを現実的なものとし、現実的なもの
を理性的であるとして、弁証法的な発展の中
に理性の実現(現実化)をみた。ヘーゲル哲
学の体系はまさにかかる過程そのものである。
すなわち、「哲学から国家および社会の
領域への移行は、ヘーゲルの体系にとって、
一つの本質的な部分をなすものであった。か
れの哲学の基本的な諸観念は、国家と社会が
それまでとってきた特殊な歴史的形態のうち
に、実現されていた。したがって、国家や社

会があらためて理論的な関心の的になったの
である。哲学はこのようにしてすでに社会理
論に移っていたのである。」(二八一頁)この
過程が思想史のうえで実現されたのがヘーゲ
ルからマルクスへの発展であった。マルク
ーゼは、このような観点からマルクスにおける
哲学から経済学への推転を問題にして、それ
を労働過程分析を通して行う。労働過程論を
中心とするマルクスの社会理論はヘーゲル哲
学の批判的側面をひきつぎ、否定的弁証法
(否定の否定)と疎外概念を核心とするもの
と考えられ、かかる「疎外された」労働の止
揚こそが理性実現のための普遍的革命を必要
とすると考えている。

マルクーゼは、マルクスにより確立された
否定的弁証法に基づく社会理論を、肯定的社
会理論と対立させ、思想の上で二つの世界に
対決した現状にヘーゲル主義が何によって
なわれ、何を解決しようとするかを更めて問
いかけているのである。(岩波書店・B6・
四八六頁・七八〇円)

—飯田裕康—